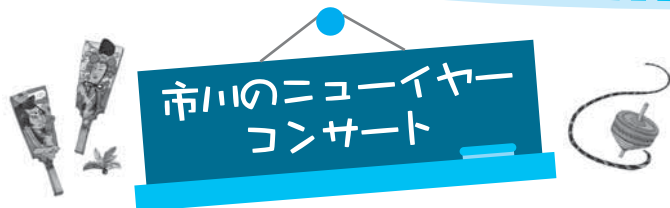


てこな・ミュージック・ジャーナル



新年を迎えて、さっそくコンサート

2008年とはとうまず1月4日新春議場コンサートが始まります。今年では2007年の新人演奏会オーディションで見事優秀賞に輝いた方々3人に出演していただきます。曲目は新年に相応しく明るく、楽しいものばかり。そして13日は行徳文化ホールでの東京フィルハーモニー演奏会、26日はニューフィル千葉演奏会、30日はNHK交響楽団メンバーによる室内楽など、新年早々、財団企画の演奏会は目白押しです。

市川恒例のニューイヤーコンサート

市川でここ数年かならず開催しているのが、ニューイヤーコンサートです。今回は1月26日。オーケストラはニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、演奏会タイトルはニューイヤーコンサート2008 in 市川「ウィーンの香りただよ 大町さんの楽しいお話付！」です。

ウィーンの街にあふれたシュトラウスのワルツ

ウィーンと言えば、昔から芸術家たちが集まる場所として知られ、19世紀にはパリと並んでヨーロッパにおける芸術文化の中心地でした。楽譜出版、楽器製造、音楽ホールなど、この時代の音楽家の多くが活躍した場所が今も街のあちこちに残っています。1830年にウィーンに滞在したショパンは、ヨハン・シュトラウスのワルツばかりが演奏され、人々はこぞって踊りに興じている、そんなところに自分は長くいたくないと、祖国ポーランドの友人に手紙を書いています。どこか軽い音楽というのがショパンの印象のようですが、他の作曲家たちは、その明るくリズムカルな旋律に心惹かれています。あの真面目なブラームスですら、「美しく青きドナウ」を「残念ながら自分の旋律ではない」とうらやまげに言い、ワーグナーもチャイコフスキーもシュトラウスファンでした。

シュトラウスファミリー

ニューイヤーの定番作品の一つが「美しく青きドナウ」です。作曲家はヨハン・シュトラウスで、シュトラウスファミリーの長男です。ヨハン・シュトラウスと書く場合はシュトラウス

市川市文化振興財団 文化芸術専門員 小坂 裕子

世のことでワルツ王と呼ばれています。ワルツ王の父は「ワルツの父」と呼ばれるシュトラウス 世ですが、現在では息子のワルツ王の方が有名です。1825年に生まれ1899年に死んだワルツ王シュトラウス 世の活躍は大変なものでした。自分と同じ音楽家の道を歩むことに反対した父が45歳で死ぬと、父と自分の楽団を一緒にして、ヨーロッパ中を演奏旅行してシュトラウス旋風を巻き起こしました。

今や大人気のニューイヤーコンサート

シュトラウスファミリーの音楽の人気は20世紀になっても衰えることはありませんでしたが、ワルツ王シュトラウスの名を一層高めた出来事が1929年に起こりました。ウィーン・フィルの指揮者クレメンス・クラウスがザルツブルグ音楽祭にワルツ王の作品ばかりを取り上げたのです。陽気で心楽になる音楽は10年後、大晦日に演奏されるようになりました。そしてニューイヤーコンサートとして1946年に恒例化して、世界中から注目される一大イベントとなったのです。

人気が高いので、チケットを手に入れるのは至難のわざ。でも会場に集うことはできなくともテレビをつければ、豪華絢爛なウィーン楽友協会大ホールが映し出され、そこに団員から選ばれた指揮者が登場します。晴れやかな表情で会場に座る着飾った人たちが心待ちにする新年早々の演奏会。曲目はシュトラウス一族に関わるものを中心に、毎年工夫が凝らされています。

定番のアンコールで大喝采

アンコールがまた、聴く人たちの気持ちを盛り上げています。「美しく青きドナウ」や「ラデツキー行進曲」が最後に必ず演奏されるのです。美しく青きドナウはワルツ王シュトラウス 世、そしてラデツキー行進曲はワルツの父シュトラウス 世の曲です。

本場ウィーンに負けないように、日本でも近年、各オーケストラが競って、このニューイヤーコンサートを開催しています。ここ市川では、ヨハン・シュトラウスと言えば、必ずその名があがるほどの大町陽一郎さんが毎年ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉を指揮をしてニューイヤーコンサートをします。今回の共演者はソプラノの針生美智子さんです。シュトラウスの喜劇「こうもり」より「ロザリンデのアリア」などなど、聴きどころ満載で、新年早々の楽しい演奏会、ぜひいかがでしょうか？詳しくは当イベントガイド、またはホームページをご参照ください。